

地区特性



海岸堤防の景観検討範囲

内陸部から見た海岸堤防の鉛直角が約1度以上となる範囲（海岸から約0.7km）

凡例

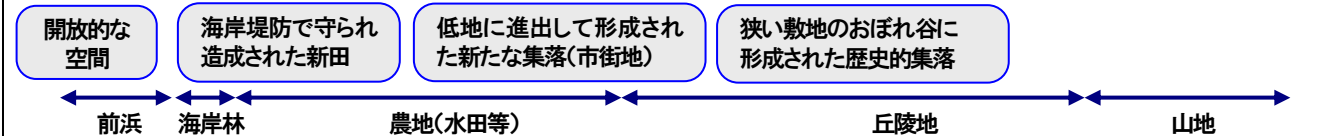
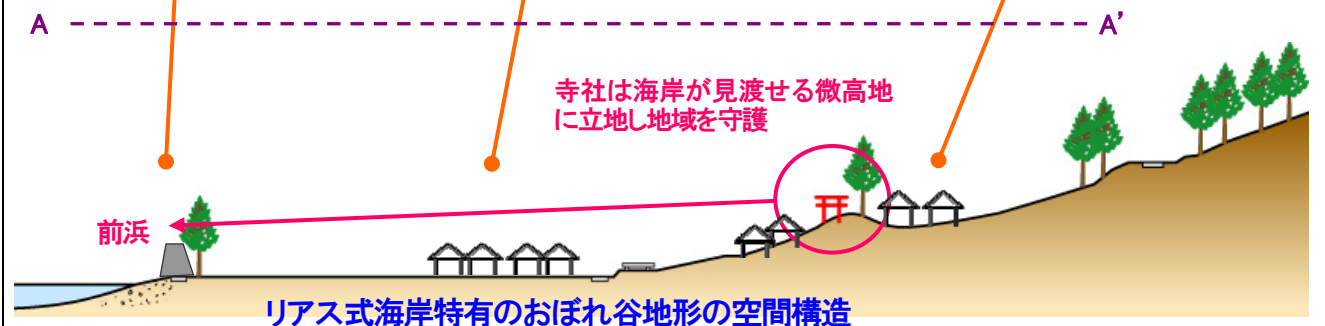
- 役所
- 神社・仏閣
- 鉄道駅舎
- 主要道路
- 地形による景観特性
- 被災による景観変化
- 施設の景観特性

景観特性

- ・リアス式海岸では、三方を山で囲われた景観が特徴で、河口部における河川軸および海岸部が唯一開かれた空間となる。
- ・山地間に挟まれた「おぼれ谷」に市街地、農地が分布し、海側に向かって開放的な景観を形成する。
- ・内陸部から海岸堤防の鉛直角が約1度以上となる範囲は約0.7kmであり、中心市街地から海岸堤防は目立たない。
- ・入り組んだ地形の岬（山）は海岸から見た景観資源となる。

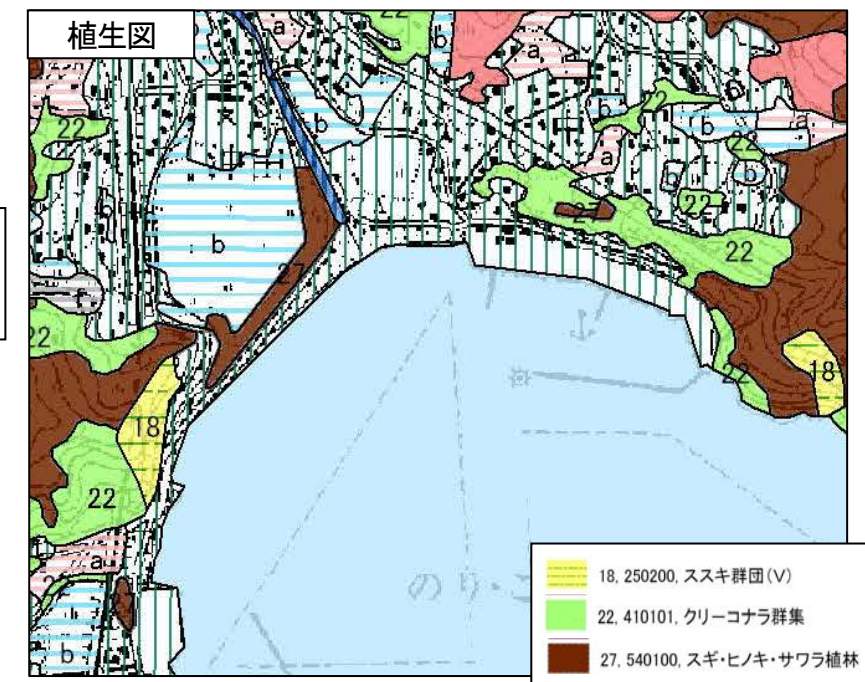
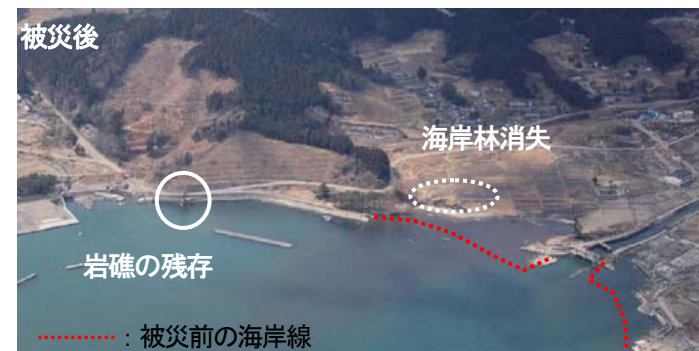
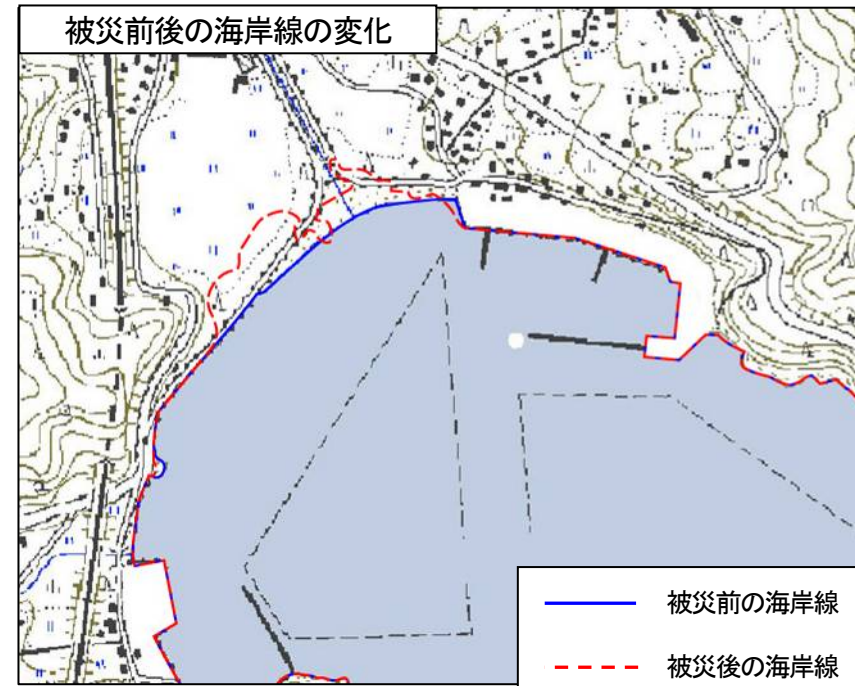
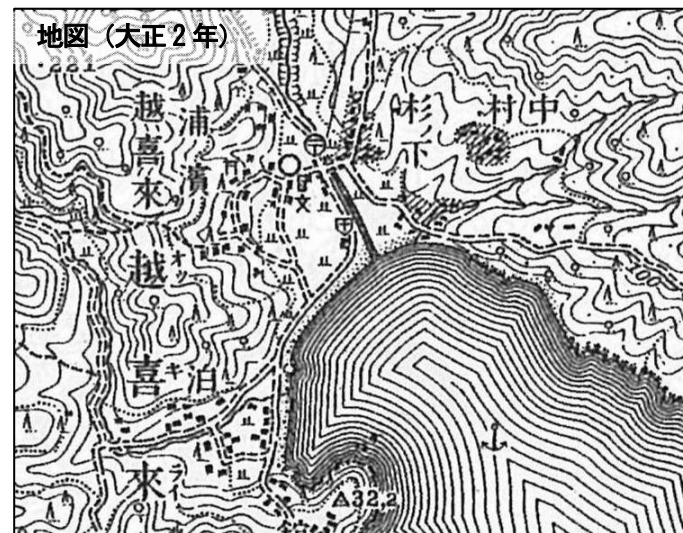
地形基盤と地域の成り立ち

- ・海岸砂州(前浜)は狭く比較的勾配がある。
・粗粒砂・礫が多く見られる。
- ・おぼれ谷の奥部にあった市街地が海岸に向かって拡大し、低地部に広い農地や住宅地が形成されている。
- ・寺社は山麓の微高地に立地している。
・三陸海岸地方の寺社には鯨の絵馬や鯨を祭った石碑等が置かれる場合が多く、地域の海との関わりの深さが伺える。

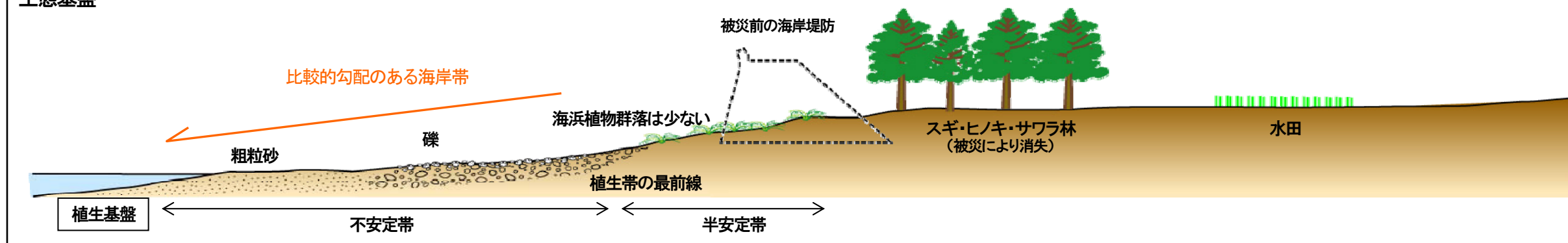


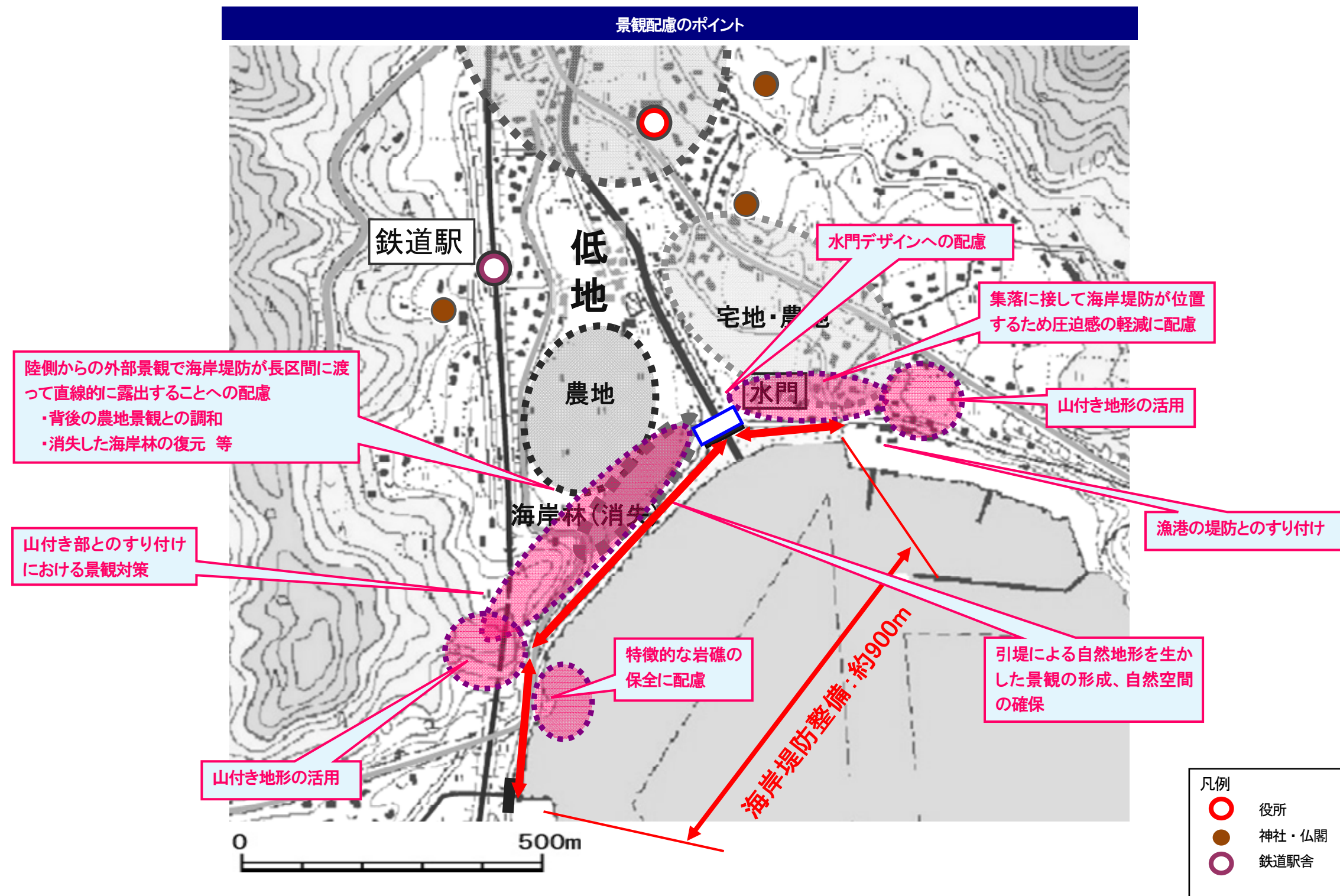
地形・生態系特性

- ・大正時代の地図では、現在よりもやや曲線的な海岸線である。現在と位置はほとんど変わらず、比較的狭い前浜である。
- ・海岸堤防背後地の海岸林は、主にスギ・ヒノキ・サワラ林である。また、周辺山麓には、クリコナラ林が分布している。
- ・被災後、海岸部は地盤沈下により冠水し、前浜や既存の海岸堤防、堤防背後のスギ・ヒノキ・サワラ林は消失している。



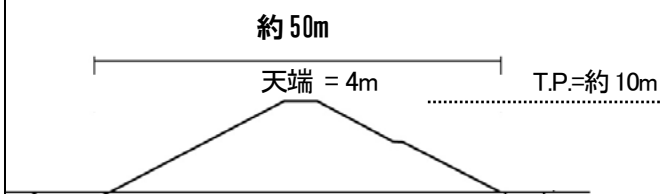
生態基盤





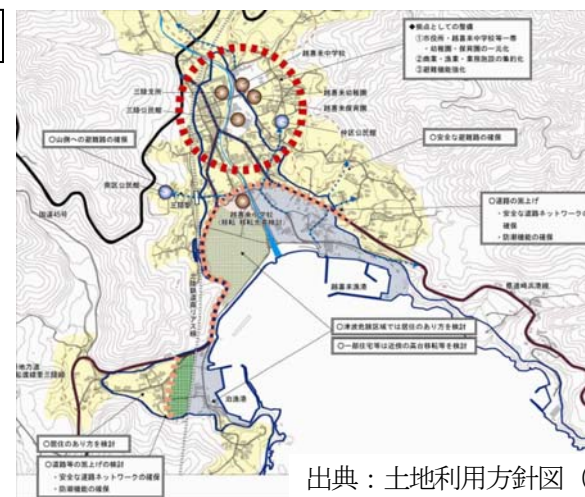
検討条件（施設構造）

海岸堤防【想定する標準断面】



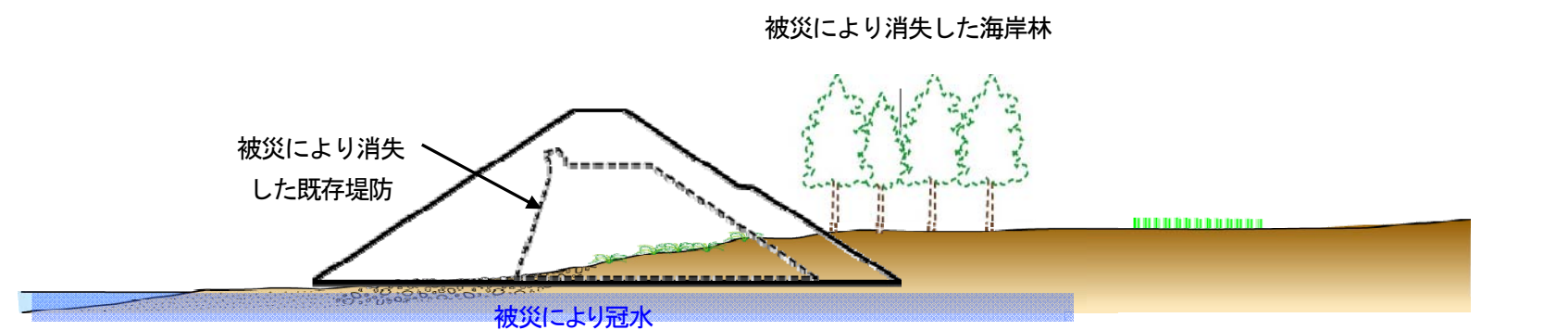
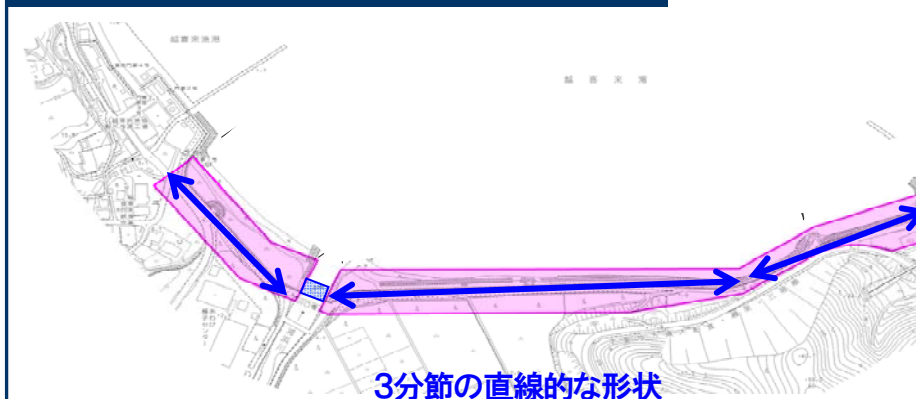
- ・高さ T. P. =約 10m、堤防敷 W=約 50m、延長約 900m の大規模な構造体を想定
- ・天端は 4m を想定
- ・法面勾配は表裏ともに 1:2 を想定
- ・表裏法面はコンクリート構造

まちづくり計画

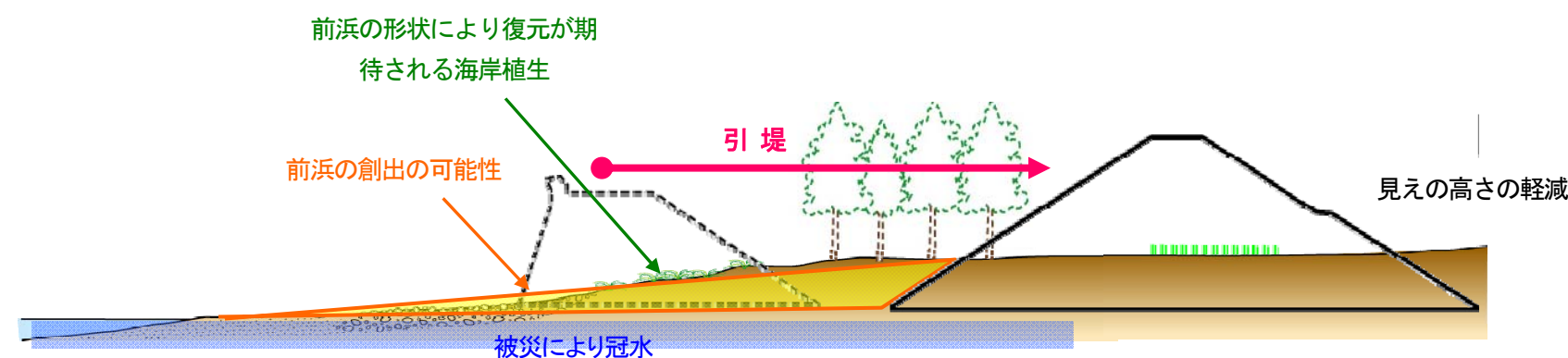
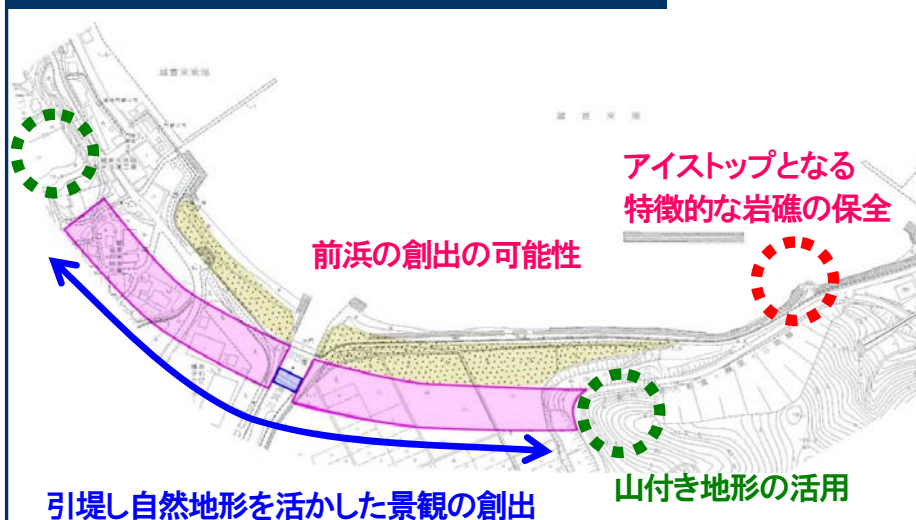


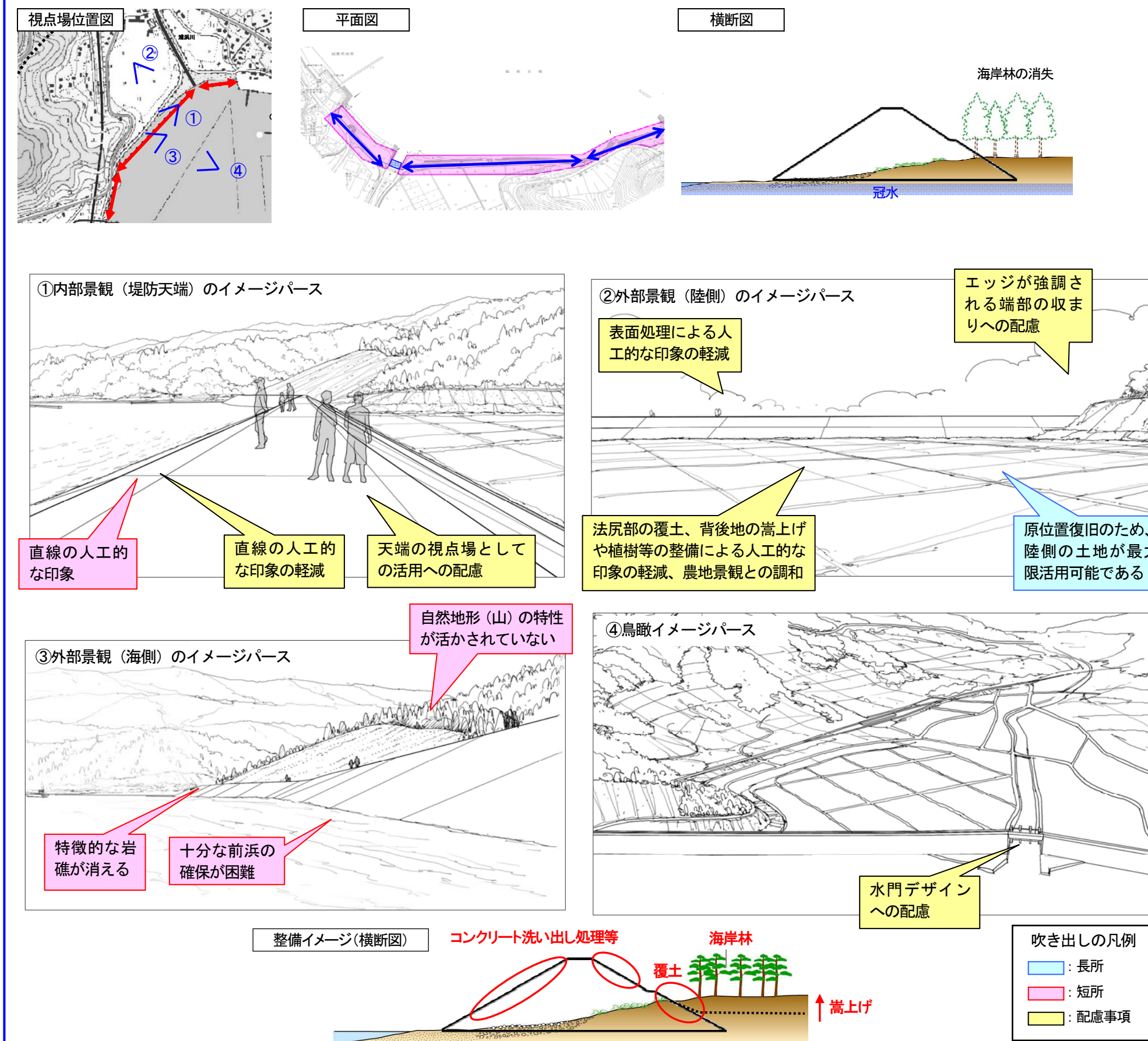
検討対象パターン

◆A パターン:原位置復旧+水門

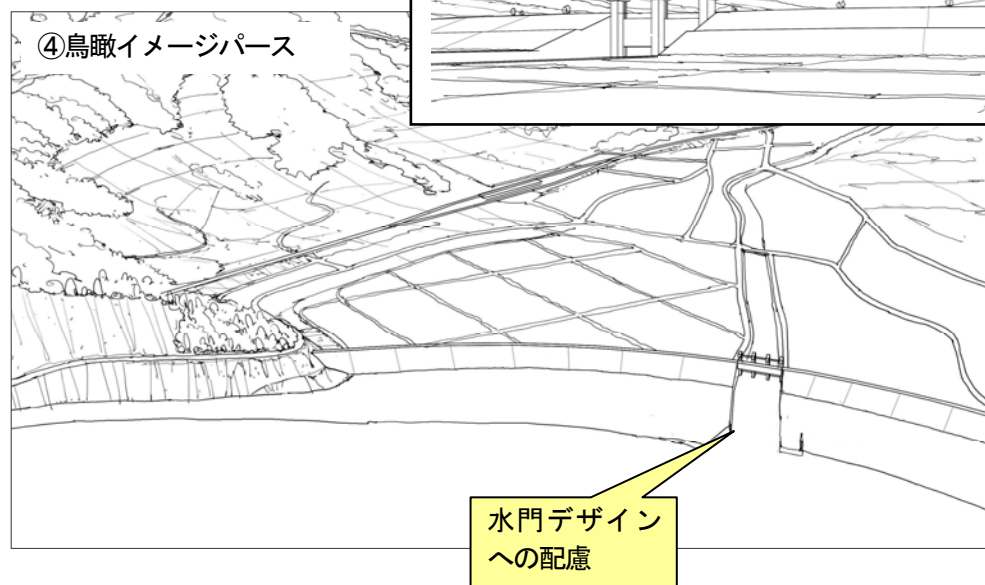
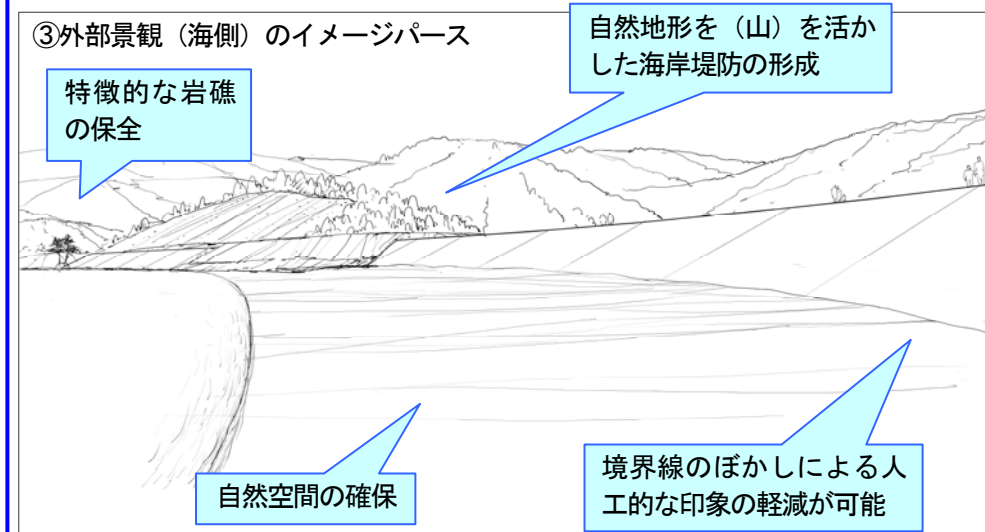
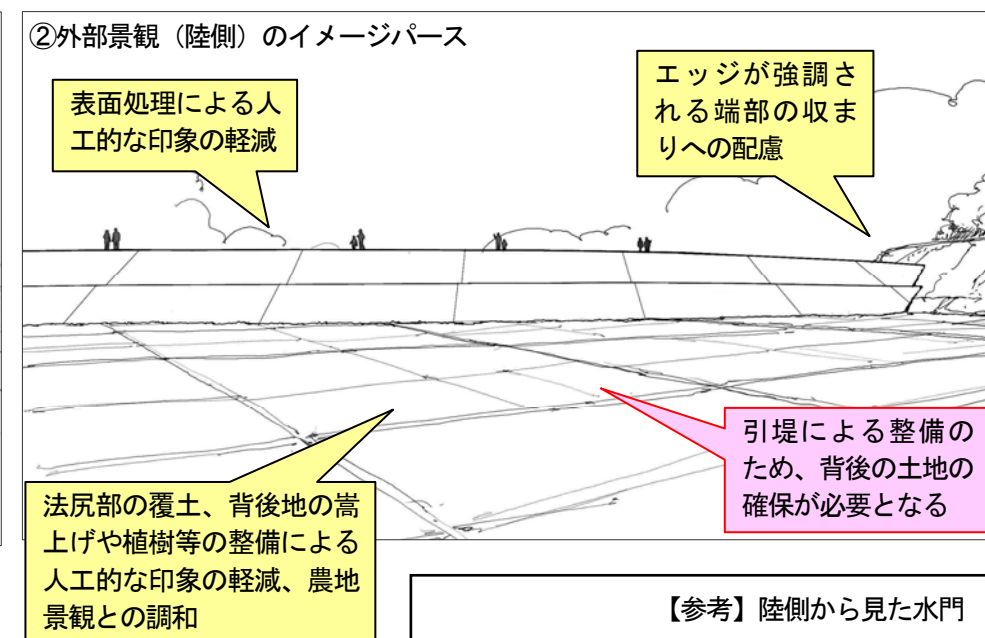
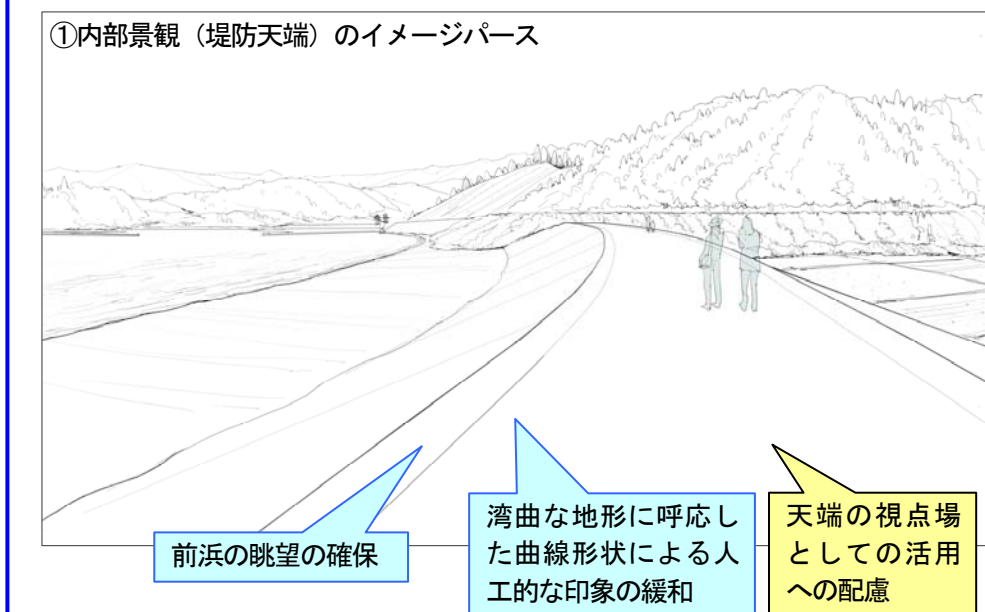
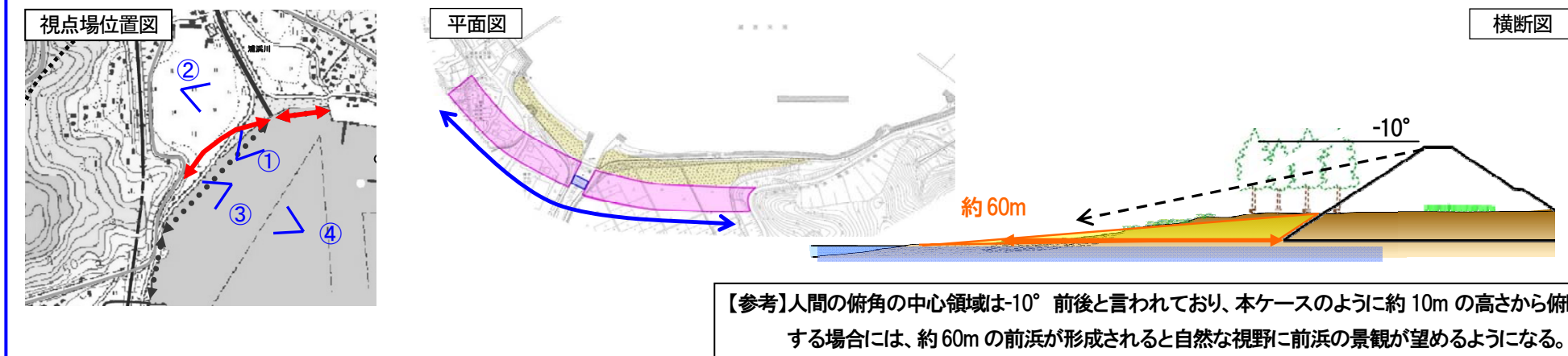


◆B パターン:引堤+水門





	特徴・評価
視覚的景観	・自然地形(山)の特性が活かされていない。 ・水平方向に長い直線形状により構造体の存在感が強調され、人工的な印象を与える。 ・表面処理の工夫、覆土や植樹等により人工的な印象、圧迫感の軽減が不可欠となる。 ・山付き部に見られる特徴的な岩礁等、原風景の確保が課題となる。
地域性	・直線的な海岸堤防がリアス式海岸特有の湾曲した地形となじみにくく、違和感がある。 ・新たな眺望視点として天端の利活用が期待できるが、十分な前浜の確保が困難であり、利用性に課題が残る。 ・集落からの海岸眺望の阻害(軽減が必要)に十分配慮する必要がある。 ・原位置復旧のため、堤防用地の確保が最小限となる。
生態系	・前浜や地形に応じた生態系の復元の余地が少ない。
サステナビリティ	・前浜等の空間が少なく、気候変動による海面上昇等への対応の余地が少ない。 ・前浜が短いため、波浪等による施設への外力が大きい。
コスト	・自然地形(山)を十分活用せず堤長が長くなるため、コスト高となる。 ・原位置復旧のため、新たな用地費等は発生しないとともに、用地取得に係る調整が不要である。



吹き出しの凡例

：長所 ：短所 ：配慮事項

特徴・評価	
視覚的景観	・自然地形(山)の特性が活かされた景観が形成される。 ・堤長の減少によって構造体の存在感、人工的な印象の軽減が期待できる。 ・表面処理の工夫、覆土や植樹等により人工的な印象、圧迫感の軽減が不可欠となる。
	・自然地形を活かした海岸堤防の整備により、本来の地形と違和感の少ない景観が形成される。 ・新たな眺望視点として天端の利活用が期待できるとともに、前浜の創出により海岸の利用性が向上する。 ・集落からの海岸眺望の阻害(軽減が必要)に十分配慮する必要がある。 ・引堤による整備のため、背後地の土地の確保が必要となる。
地域性	
生態系	・前浜や地形に応じた生態系の復元の余地が生まれる。
サステナビリティ	・前浜等の幅広い自然空間によって、気候変動による海面上昇等への対応の余地が生まれる。 ・十分な前浜により波浪等による施設への外力の軽減が図られる。
コスト	・堤長の減少によるコスト削減が図られる。 ・引堤による整備のため、用地費が必要となるとともに、用地取得に係る調整に時間を要する可能性がある。